

# ねこの みこの

猫養通信

第18号

平成七年

(1995)

1月15日発行

(年4回発行)

## 福井隆秀さんの手紙

東明雅

福井隆秀さんが十一月二十七日逝去された。猫養の重鎮としてだけではなく、その人物・文才は他の派の人からも高く評価され、ことに連句協会理事として、「連句年鑑」の編集に献身された人だけに、連句界全体の大損失であろう。改めて御冥福を祈る次第である。

私は逝去一ヶ月前、お手紙を頂戴した。

「猫養庵発句集」をさし上げたそのお礼の手紙であるが、隆秀さんは気に入った句を五つのパターンに分け、次のように書いて下さった。

①まず、何といってもお酒の句

・喉走る酒が命やちちろ啼く

(酒が命なんて、いいですネ)

・味はひは虚実皮膜の新酒かな

・肝臓をだましつつ酌む夜長かな  
(私はだませなかったのでアウトでした)

・腸にしみる昼酒河童の忌

・春逝くや今日も二合の酒に昏れ

(哀感があつて心にしみます)

②食物(草間先生は食べ物の句の第一人者ですが、先生も劣らず佳句多いです)

・芋棒の軽き夕餉や花の旅

(軽み)

・松茸が膳に香るよ休肝日

・あたたかや皿にはみ出す稻荷鮓

(あたたかやがいいですね)

・深川や蕎麦屋を出れば初時雨

(粋)

・夢の世に住みて夫婦や煮大根

(煮大根が実に効いて、こういう夫婦になりたい)

・鱈汁や昼も灯して老ひとり

(あはれ)

③ユーモア

・筆は一本箸は二本や秋の暮

(斉藤緑雨? 衆寡敵せず、三本は又銃。こんなのが始まったら大変)

・鯨の顔見れば見る程祖父に似て

(プツとふき出しました)

・けちばかりつける女や藪虱

(居ますものねえ。こんなスケ)

・八十のがらくた爺山笑ふ

(七十の爺色気なく水の秋)

・ぶら下る外に能なき糸瓜かな

(かみさんにいびられてゐる男郎花自画像)

④艶

・洛陽に細腰多し花氷

(李白、仙女にあこがれ権勢何するものぞ)

・昼の酒連れいつよりか雪女

・靴下に蝶の刺繡巴里祭

(往年のフランス白黒映画を見ているように、若々しいです。フレッシュ)

・伏籠には恋の沙綾衣水仙花

(「恋の沙綾衣」―芝居の題名にしたいです。)

⑤情緒

・夜神楽の葛飾葛西江戸の果

・現し世の月もおぼろに木挽町

(いいですよ、イヨオ 音羽屋ア!)

・秋しぐれ芭蕉稻荷は御縁日

(鏡花の世界)

・たこ焼きの路地を抜け来て初句会

(下町)

私は発句集を出したのは初めてである。隆秀さんはそれを考えて、こんな甘い評を下されたであろう。二十余句の中には外の人は誰も取り上げない句も数句入っている。

私はこの評を読んで、今更、隆秀さんの優しい人柄を偲び、本当の知音を失った悲しみを新たにするものである。

『猫養庵発句集』上梓に寄せて

俳諧の味わい

小澤 實

『猫養庵発句集』を愛読している。単に恩師の句集であるからではない。他のものには味わえない面白味が横溢しているからだ。

一例をあげよう。「松の事は松に習はん老の春」は『三冊子』に見える芭蕉の重要な遺語を踏まえる。芭蕉に学び、「もの」そのものに習おうとする態度表明である。芭蕉の文学は踏跡の文学と呼ばれるが、その面を近代の俳句は捨ててきた。それを生かす試みとして貴重である。同様の試みとしては「冬の日」を踏まえる「狂句木枯エスパニヤまで来つるかな」がある。楽しいではないか。

安曇野は昏れてむらさき春炬燵

夏至さびし味噌汁かけて飯を食ふ

そら耳の葛西囃子や杜若

鯨の顔見れば見る程父に似て

昼の酒連れいつよりか雪女

丈高く、それでいて硬直していかない。しなやかだ。のびのびとした気分、庶民感覚の軽さ、おだやかなおかしみ、人恋しさ、さらには恋のほめめき。地名も動かない。これはまさに俳諧の気分ではないか。俳諧から俳句に齎らされた豊かな富がここにはある。

翁うつしの「にほひ」

別所 真紀子

句集、詩歌集など載いて本文第一ページを抜くとき、いつも胸がときめく。巻頭には何ほどか著者の存念が載り出されていると思うからである。俳諧連衆の裾につながる冥加に拝領した『猫養庵発句集』、最初のページに思わず嘆声をあげて家人に不審がられた。

卵黄のいろに日一日といや増す太陽の光が

重ねられて春が匂い立つような発句の軽やかさ新しさ。脇の「うねる」の絶妙さ、「て」留めに対する第三の「牛二三」のあしらいのよろしさ。付合のお手本がここにあると思つた。また「俳諧師の発句集」であることをさり気なく示唆されているように拝察したのであった。旅体、挨拶、前書の置かれているものが多いことに、芭蕉研究の第一人者であられることがそのまま生きて表れていると思うけれど、その「翁つくし」はたいそうさり気なく、「にほひ」として感じられる。去來の言葉借りて、「言語筆舌に言尽難し」と申しあげるほかない。好きだと思つた句には付箋を付けてゆくが、艶、洒脱、ほそり、しをりと限りなくて、うす紅の付箋を使っているため、頁の間から花びらが咲きこぼれたようなご本は、戴いた日からずっと私の机上にある日々嬉しく学ばせていただいている。

おおらかな一声

大野 国士

読初や書架の高きに師の御著 国士

東明雅先生との出会いは、とりもなおさず連句との出会いでした。今、美濃派に身を置いています。「旧派ぞなもし」と、子規が憮然とした面持ちで言いそうですが、皮袋だけの問題に帰すべきではないでしょう。

「優雅だね。よろしい。国文に來なさい」

東先生が私に初めて話された言葉です。学部進学に際しての面接前夜に小説を読み過ぎ、当日寝過ごしてしまって学校へ呼び出され、幾人もの先生から他へ行くと油をしぼられた挙げ句の、主任教授のおおらかな一声でした。拾っていただきました。

句は人間そのものです。句集を拝読しておりますと、あの頃のように先生と対酌しているような気持ちにさえなってきます。「安曇野は昏れてむらさき」、「そうでしたね」。「けちばかりつける女や」、「えっ、誰ですか、それは」。「八十のがらくた爺」、「またまた、何をおっしゃって。いけませんよ」。「味はひは虚実皮膚の」、「季語の新酒が旨そうですね」。

重心を失ってしまった俳句の時代において、発句集は光を放つことでしょう。今度お会いできましたら、また力強く握手して下さい。

『猫蓑庵発句集』を読んで

秋元 正江

先づ最近の句集の題名の傾向からいって題名がユニークであり、猫蓑庵とは、我々猫蓑会の主宰であられる俳諧師明雅先生のこととはすぐわかるもの、句集ではなく発句集であることに注意して頂きたい。我々連句を学んでいる者に発句の手法がここにある。俳諧からきり離されて一句独立した俳句と発句の違いが、ここにあざやかに並んでいる。

姉がみな若かりし世の蛍かな

姉がみなとあるから複数の女性像が浮かぶ。季節は夏。余意余情にあふれた発句で一卷の巻頭として続べている。姉がみな若かりし世とあるから単衣のきものに身を包んだ姉上たちの世界を覗いている蛍は、明雅先生であり、多感な少年時代の懐旧の発句で、先生は白地の緋のきものに兵庫帯をしめていられる。夢幻の蛍は作者であり、恋句ともとれ、優に一篇の短編小説にもふくらむのだ。

死にたくて死にたくなくて目刺焼く

人生の大事と目刺との取り合せ。この句を読んでいると不思議に食欲がわく。食べ頃に焼けた目刺、脂ののった塩加減などその省略の部分に作者は皮肉な目を持っている。この発句は散文に季語を入れたものでなく、十七文字に更に季語がひびいているのだ。

発句集の復活

近藤 蕉肝

『猫蓑発句集』は普通の句集とは違う。句集は五万と出ているが、こんなのは百年来なかつた。恐らく管見では子規以後の俳諧史に起きた最も革命的な出来事であろう。

これは句集ではなくて発句集である。それが証拠に全二百句中九十九句まで脇句と第三句が付けてある。ということは、それを付けた座の連衆の句集でもあるということだ。世の俳人が俳句の座ということをおっしゃるけれども、座は連句の座でなければならぬ。

この発句集が出たので、これから発句集が流行するようになるかもしれない、と思うのは甘い。連句の座に連なった場合、発句を作るのは正客や宗匠などの限られたメンバーであるから、普通の人では発句を作る機会がないのである。では連句の座を想定して、一人で発句を作ればいいのであるが、それでは脇や第三をつけてくれる人がいないのが淋しい。だから発句二百句中九十九句まで脇と第三が付けてあるということは並大抵のことではないのである。

狂句木枯エスパニヤまで来つるかな

ピレネーの雪けむる国境

芭蕉の枯れ野の夢は、三百年後の今国境ほを越えた宇宙マンダラの世界を駆け巡っている。

優しい挨拶

橘 文子

ふっと開いた頁の一句、その一句の奥深い広がりを感じる。そんな読み方が私は好きです。

雛の花生きてることが面倒に

姉がみな若かりし世の蛍かな

一頁一句。配置の妙。

今生も後生もあらず河豚汁

煮凝のやさしく箸にさからひぬ

これは紛れもない発句集。明雅俳諧の軽みの境地在り広がっています。他を寄せつけない俳句とは異った、優しく、清々しく、後に続く付句を待って下さる発句です。この発句に誘はれて、連衆は、明雅先生の遊んでをられる境地に近づくことが出来、連句ならではの醍醐味を味はひます。

俳句と発句の違いは？ と考えるよりこの発句集を開けば自づと合点がゆくでせう。

挨拶としての、安曇野と春炬燵、木挽町のおぼろ月、洛陽には花氷、深川の初時雨、土地と季語との、これしかない呼吸が絶妙です。

また、この呼吸は、お酒、食べものの句に特に感じられました。河童忌の昼酒、逝く春の二合の晩酌、躁鬱と麦酒、芋棒、とんぶり、煮大根、鯛焼、等々。

瀬祭忌更けて牛乳ココア入り

煮大根、鯛焼、等々。

瀬祭忌更けて牛乳ココア入り

蕪村俳文「月夜の卯兵衛」と「宇治行」

中島 啓世

今は亡き岡田利兵衛（樞衛）先生から受講した時、特に印象深かったもので短文ながら、南画的な風景の描写に加え白楽天、杜甫の詩をかまませ、心ゆくものを覚ええました。

蕪村が二十七歳の時、師の夜半亭宗阿を失ったあと江戸から結城の雁宕を尋ねた寛保二年初冬からの漂泊の旅で、出羽から外ヶ浜にゆく途次、九十九袋の寺に泊り夜中にコトコトと音がするので境内に出てみると「卯兵衛」という老人が居間は暑いからと、月夜を幸い麦をついでいるのでした。蕪村は文章を右に次に「涼しさに麦を月夜の卯兵衛哉」と書き、左端には可愛い兔が水色の半天を着て麦をついでいる淡彩自面賛を残しています。

私は早速秋田県は八郎潟にゆき、夜叉袋へと尋ね入りました所、幸いにも地藏盆のため平素は無住寺なのに一向院の福土龍雅住職にお会いして、お話を伺うことが出来ました。

境内に数百年の樺があり、蕪村と卯兵衛も見ていたことと感無量でした。蕪村が没した天明三年十二月二十五日から僅か三ヶ月程前の九月十五日に、宇治田原の酒造家、奥田治兵衛（号は毛条、野菊庵）に招かれて茸狩に出かけたのが高の尾村。「宇治行」として美文と「君見よや拾遺の茸の露五本」墨絵付の真

蹟自面賛が逸翁美術館に所蔵されております。

この「宇治行」を受講して間もなく京阪で宇治にそして「岩山行」バスで郷の口で降り、毛条の旦那寺、報告寺を訪ね、住職登田様の御好意で、高の尾村まで御案内いただきました。ここは平家の落人が住みつき、汲鮎を業とする小部落で、折柄五月晴のもと、西に京都、愛宕、水の尾あたり、南は大阪、生駒

暗峠、足元には紺碧の天ヶ瀬ダムまでが見えかくれ、折しも時鳥が鳴き過ぎ、梅、山梨、赤松も蕪村の頃は余り変りない有り様にしばし懐旧の想に浸りました。

蕪村は毛条宅に大歓迎のもと家族一同で泊し、翌日早速鄭重な礼状を出しています。その文中「皆皆生涯覚えなき楽しみ、言語に尽す所なく御座候」の一行にその喜びの程よくわかりました。その十日あと、不二庵（大阪二柳）宛の手紙に「胸痛で困る、大方天年も尽し候故、やがてアッチものと覚悟いたし心細く候」とあり、かねて腹瀉もしばしばおこり、几童から「桂附」を貰い、心残りの娘「くの」の行末を月溪と梅亭に託して、ついに十二月二十五日他界いたしました。田原町には毛条と几童の両吟歌仙が残っております。

両吟歌仙 蟬の声

蟬の音にこぼるる松の古葉かな 毛条

涼しき方へ運ぶさむしろ 夜半亭三世几童  
詩なくば酒飲まさじとからかひて 毛条

以下略

「快樂装置」としての連句

北村 良輔

ある日、岩波文庫『寺田寅彦随筆集』という本を手にしたら、「あらゆる芸術の中でその動的構成法（モニタージュ）においては最も映画に接近するものは俳諧連句であろうと思われる」という文が目に入りました。

モニタージュとは元々建築の言葉で、設計に従ってレンガを積んでゆくことを示し、転じて、映画用語として、一つのアイデアのもとにレンガを積むように画面と画面をつないでゆく「画面の足し算」を最初意味していました。しかし、そんな四角四面のお行儀良く画面が正座しているような映画ではなく、画面と画面が勢いよくぶつかって、どんどん観客の前に引っ張ってくる、映画の醍醐味を導く「画面の掛け算」に対して使われるようになりしました。エイゼンシュタインの「戦艦ポチョムキン」がまずこのことを実践します。それ以来、各シーンのぶつかり合いが醸し出す、得も言われぬ心地よさ、緊迫感とやすらぎを同時に感ずる快樂空間を映画館で味わえるようになりました。

連句の付け心とその流れが、このモニタージュに似ていると聞き、映画館にいる時の心地よさを連句の場で感じていたことを映画百年の今年に実感いたしました。

第十五回 俳諧芭蕉忌 (第五十一回猫養会)

平成六年十月十九日  
於 江東芭蕉記念館

正式俳諧興行「翁忌や」

捌 副島久美子

「山茶花や」の巻 東明雅

捌

第一部 正式俳諧興行「翁忌や」一卷  
第二部 二十韻八卷

役割

宗匠	副島久美子	席改め
脇宗匠	豊田 好敏	席入り
副宗匠	内田 麻子	配硯
執筆	市野沢弘子	献花
知司	峯田 政志	執筆呼び出し
副知司	篠原 達子	文台捌き
座配	倉本 路子	俳諧興行
座見	須田 智恵	花前
花司	橘 文子	献香
配硯	岩井 啓子	花の句披露
同	久保田庸子	端作り
同	雑賀 遊	吟声
老長	中川 哲	文台返し
解説	下鉢 清子	作品奉納

納硯 挨拶  
退席

平成六年十月十九日  
於 深川芭蕉記念館

翁忌や仰ぎてゆゆし掟書

塵ひとつなき床に寒菊

公園のお手玉の歌賑やかに

モンスラルックいそいそとゆく

ヒマラヤン毛づくろひする月の窓

楽屋に届く蘭と恋文

英語では情通ぜぬそぞろさむ

悪魔の舌と訳す蒟蒻

山の寺修行道心禪がけ

清水を汲んで村おこしする

土用芽にさわさわと風渡り来て

パラボラアンテナニュースキッチす達子

逢ひたさの吐息に曇る玻璃ぬぐひ

添乳の嬰に惚ぶ面影

凍て月に四股鉄砲をくり返し

銀座のバーで焦げ付いた付け

長編のライフワークは半ばなる

軒に見つけし初のつばくら

花時雨人待ち顔の旅の群

かはるがはるに揺らすふらここ

山茶花や翁はいつも旅姿

笠に時雨の音を聞きつつ

珈琲の後も仕事に打ちこみて

細きこけしのすこし揺れるる

観音堂ゆらりと出づる十三夜

逢ひに行く日の秋の蚊緋

破れ蓮悪女にもなり切れずして

ふるふる煮ゆる豆腐こんにやく

トップ記事ノーベル賞のことばかり

眉の奥から総理閣兵

虹の橋柵かたかたと鳴らしゆく

ほのかに涼し能管の月

昼九夜八酒なみなみと酌みかはす

女将そっくり壁の美人画

日数経し我恋文は失せたるや

一羽残らず伝書鳩消え

村の者疫病避けて逃げしとか

石齡の玉で遊ぶ子供ら

花の雲真間には古き手兒奈堂

霞の中に開く草の戸

平成六年十月十九日  
於 深川芭蕉記念館

連衆 ウィリアム・ヒギンソン (緋庵)  
浅野黍穂 近藤蕉肝 原田千町  
筒井紅舟

「時雨忌」の巻 今宮水壺 捌

「床の軸」の巻 梅田利子 捌

「翁の忌」の巻 加藤治子 捌

時雨忌や身に尺寸の志 水壺

太き柱となりし綿虫 久美子

新刊本机の上に積まれるて 弘子

御飯出来たと母の呼ぶ声 達子

月浴びてウォーターシュート滑り降り文字

「危険がいっぱい」冷まじきFIN良彌

己から君が手の中囿篋 文

息もびったり秘書と重役 久

文化庁追っかけ叙勲断られ 文

故郷の森鎮もれる樹々 久

誰彼も白髪頭のクラス会 弘

香港の旅にぎやかにゆく 達

老酒のじんと浸みこむ風邪ごこち 彌

主寝かせてしのび出る木戸 達

夏羽織脱いで脱がせて曇月 久

鉢の金魚の二匹ひらひら 弘

講釈師虚実交々声張って 達

村人集ひ製茶はかどる 久

額づけばまたひとしきり花吹雪 弘

字風の高く揚がる原っぱ 彌

しぐれ忌や夢を大書の床の軸 利子

敷松葉して迎ふ客人 雅代

鷗鳴く運河の堰を開くらん 瑞枝

テレビ取材のコードながなが 路子

洪滞の高速月も遅々として 蓉子

寄せ合って居るやや寒の肩 政志

姪などと言繕ひつ戸瓶蒸 路

価格破壊で緩むお財布 同

ウィーン歌劇スペシャル席で眠りこけ 代

低血圧は親子揃って 蓉

旧道の本陣屋敷夏炉焚く 枝

藤村談義明易き月 志

初恋のジंकクスなんて目じゃないと 蓉

狂言自殺で射止めたる彼 代

逝きし友病む友我も老いにけり 路

政界未だ狐火の原 志

シェーカーをS字に振ってカウンター 瑞

ルーキー囲む春宵の宴 同

白神の山懐に花吹雪 代

北へ北へと蜂飼の旅 蓉

習ひこし連句いろはや翁の忌 治子

和気あひあひと冬萌の草 淳子

ラジコン機翼を振りて中空に 健悟

ゴルフのクラブ磨きるるパパ 淑代

豊作の焼松茸をたっぷりと 一恵

馬も肥ゆると励む瘦身 志げ子

十三夜歩みを停めて唇うばひ 淳

お待ちなさいよホテルすぐそこ 恵

国道の処々に地震の痕 悟

難民の子の開く教科書 代

賀茂祭白丁の袖のほころびて 志

池ひろびろと泳ぐあめんぼ 淳

張込の刑事が声をかけてくる 悟

転々とするカタカナの職 代

お守りが巨きな胸の上で揺れ 悟

暖炉の前の恋は激しく 恵

忘却といふに儚きノート繰り 恵

囀り聞きつ仰ぐ昼月 志

窯出しの祝ひの酒に花吹雪 志

種袋つけ届く風船 淳

平成六年十月十九日

於 深川芭蕉記念館

連衆 副島久美子 市野沢弘子

篠原達子 橘文字 佐藤良彌

平成六年十月十九日

於 深川芭蕉記念館

連衆 滝川雅代 大窪瑞枝 倉本路子

五味蓉子 峯田政志

平成六年十月十九日

於 深川芭蕉記念館

連衆 上月淳子 佛淵健悟 浅賀淑代

山崎一恵 蒲原志げ子

「桃青忌」の巻 下鉢清子 捌

俳諧に半生委ね桃青忌

清子

床脇飾る笠とさざんか

あかり

鼓笛隊参加の児等のにぎやかに

好敏

ペンギンじるしのチョコを配りぬ

啓子

気付かざり電気歯ぶらし使はれて

かりん

耳に宝石光らせた奴

よしえ

月の海ヨットの所で抱擁し

り

蜘蛛の囀かかる岸の乱杭

ん

古き人集めてつくる新々党

敏

ショック療法受けてぽかんと

り

繰り返し禁酒禁煙誓ひたる

え

遺跡掘ったり陶土捏ねたり

啓

初雁のロシヤ野越えの棹の折れ

清

肌の妖しくブロンドの月

啓

君放つ媚薬の香り菊枕

敏

孫の電話を心待ちして

同

見せ消しの吉川英治三国志

り

赤鉛筆に春ぞ隔たる

ん

謝恩会晴着それぞれ花の下

敏

ふらここ漕ぎつ揃ふハミング

え

「芭蕉忌」の巻 中島啓世 捌

みもとせの芭蕉忌修す打ち集ひ

啓世

碑の辺に紅葉散る庭

孝子

水平線タンカーの影現れて

満子

背の子供が小躍りをする

遊

取り置のうま酒すすむ月今宵

富美

天狗茸採る魔女のほほゑみ

豊美

かまきりの如く男をえさにする

八重

銀座通りで車接触

孝

骨董屋暴力団より転職す

豊

野仏丸く剥落の顔

満

短夜の夢のかげらをかき集め

遊

袋掛けすむ月満つる頃

八

シンセサイザー砂丘の旅をテーマにて

孝

妻となる身の弾む胡旋舞

同

唇が好きで乳房が又好きで

遊

ふはりと積る灯籠の雪

孝

マニユアルは何度読んでもチンプンカン遊

遊

蛇穴を出る日どり当らず

豊

花咲くと母の便りは越後より

八

こごみに添へし甘きごま味噌

富

「冬浅し」の巻 東 郁子 捌

冬浅し石の蛙の庵跡

郁子

ほろとこぼるる籬のさざんか

央子

キルト縫ふ握り鉄の鈴鳴りて

道子

濃目に淹れしティーとクッキー

みづゑ

月蒼く尾越の鴨の群渡る

澄子

君と出逢ひし穂芒の蔭

守男

芸術祭身重を隠すトウシューズ

み

ノーベル賞で本は売切れ

男

さまよへる湖で行ふ核実験

澄

馬乳酒呷り羊追ひゆく

央

親方の留守にのんびり三尺寝

道

吊るされてゐる縮すててこ

澄

ごみ捨ててさっぱりとする離婚晴

同

新しき恋凍月の下

道

登り窯火禱に賭け半世紀

道

青い魚は健康によい

郁

異邦人混えジヨギング皇居前

ゑ

子供らの歌響くうららか

男

花あかり寺々沈む古き町

央

地平はるかにかかる初虹

男

平成六年十月十九日

於 深川芭蕉記念館

連衆 中田あかり 豊田好敏 岩井啓子

若尾よしえ 登坂かりん

平成六年十月十九日

於 深川芭蕉記念館

連衆 坂本孝子 田村満子 雑賀遊

村田富美 高橋豊美 本田八重子

平成六年十月十九日

於 深川芭蕉記念館

連衆 山口みづゑ 遠藤央子 近藤守男

加藤道子 八角澄子

「冬めくや」の巻 百武冬乃

捌

「温め酒」の巻 東明雅

捌

冬めくや砂利道砂利の影を舗き

冬乃

みそさゞい飛ぶ低き植込み

和子

厨辺に漬菜こまかく刻みゐて

哲

お風呂掃除の好きな末っ子

美津

ノーベル賞決まりしニュース月皓々

庸子

人肌ほどの温め酒欲る

達郎

まるめろの匂へるごとき妻娶り

紀子

聖女変じて閨は般若に

哲

襲名にちよつと足りないお車料

和

いかすみパンの直ぐに売り切れ

庸

蝉時雨呆けし母の正座せる

紀

月を映して井戸替のひと

達

ルワンダの火山のふもと辿りつき

紀

胸乳で止める一枚の布

和

まとひつく狎に浮気をそつと告げ

哲

ガレージセル妙な小道具

紀

夢のごと丸木小屋からハローモニカ

美

風光る空本壘打うつ

庸

島中のうから集ひて花の宴

達

うらゝうらゝと付句案ずる

美

平成六年十月十九日

於 深川芭蕉記念館

連衆 式田和子 中川哲 桑原美津

久保田庸子 滝沢達郎 椿紀子

温め酒雨となりたる誕生日

淳子

月待つ芒揺く脇床

あかり

ヴァイオリンソロの調べの爽やかに

良彌

片足とびで輪を作る子ら

文字

鼻なでて鞭一本の象使ひ

千代子

見渡す限り枯野めく町

明雅

ユトリロにポーナスの額追ひつかず

文

独身寮はみんな夜更し

千

緬甸人指笛鳴らし合図して

良

甘い煙草の香が迫り来る

淳

海の風抜ける甲板拭くモップ

り

この頃流行るマンタ見物

千

噴水のしぶきさらさら月を浴び

淳

眠り薬に受賞作読む

文

メイクして貰ふベッドのチョコレート

良

裏の庭から丹沢の山

淳

ぬかづけば枝垂るる花の盛りにて

文

囀りを追ふ点となるまで

り

初虹の彩を飾れるウインドウ

同

壺中の天はいつも青空

良

願はくは散骨の葬われ死なば

千

旅の計画うから集めて

淳

旧党に未練半分新々党

文

のびゆくものは眉ばかりなり

同

御後室様にあこがれ幾年ぞ

良

角巻ひそと抱けば溶けさう

り

黒塗りの忍返ししの別座敷

舟下りする柳散るころ

寅さんのトランク照らす後の月

飯噴く厨ちちろ虫鳴き

夢破れ夢また育つ五十才

けちとはげとは誰の遺伝か

ナイターも巨人で息をふきかえし

伊達の薄着で春の風邪ひく

霊媒のまぼろしを見る花の下

野はひろびろと燃ゆるかげろふ

淳

千

良

り

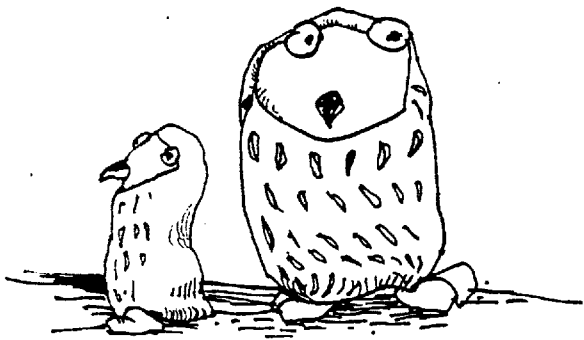
文

千

雅

千

平成六年十一月六日  
江東芭蕉記念館





彬風氏を悼む

氏原 正雄

氏は東京日本橋室町の老舗（呉服商）に生れた。東京大学美学を出たが、思う処があつて京都大学法科に進み、卒業と併に藤倉ゴムに入社するも、召されて九段近衛連隊に入隊、前橋の予備士官学校を卒業し南方戦線へ、スマトラで終戦を迎え、マレーに抑留された。故国に帰還して藤倉ゴムに復職し、最後に取締役人事部長として社に貢献され、五八歳で勇退された。

もともと芸術的資質に恵まれ、新潟高校ではオーケストラを編成して、自ら指揮棒を振った。戦線に在っても句作にふけり、有志を集めて句会を開きもした。帰国後連句に興味を持たれ、東明雅先生の連句教室で一期生として研鑽を積まれた。教室では私達の二歩も三歩も前を進まれ、その感性は抜群で、実作においても天性を發揮して深い尊敬を受けた。猫養会に在っては監事として運営に参画され、その温顔とソフトな態度で会の皆様に慕われた。対外的には東先生の推挙で興業銀行連句会の指導に当られた。特筆すべきはお孫さんをも加えた「家庭連句」の試みであり、そのユニークさが一般の注目を浴びた。又氏は愛書家として知られ、妻、子、孫皆様に囲まれて静かに去って逝かれた。享年七六歳。合掌。

連句とさかなの杉亭さん

豊田 好敏

行々子庵杉亭宗匠（愛称さんていさん）が亡くなって、早くも三ヶ月が過ぎてしまった。東洋にも西洋にも「去る者は日に疎し」ということわざがあるが、こと杉亭さんに關して、私にはまだまだ当分の間は、生前の仕草や面影が髣髴として目に浮かび懐しさが偲ばれてならない。

これは多分、連句という座の文芸を通じて知己を得、脳髓に限りなき刺戟を与えてくださった方だったからではないだろうか。いまこの文章を書きながら、本誌「ねこみの通信」に連載された\*連句とさかな\*の囲み記事を思い出している。

酒とさかなの取り合わせは杉亭さん独特なものがあるが、常に句の魚を題材として包丁捌きもあざやかに料理され盛り付けられてこられた。

庵号の行々子（よしきり）は、住居に近い井の頭公園に群棲していて、それに肖って東明雅先生のお許しを得たとうかがっているが、われわれ後輩が行々子のように「わいわいがやがや」騒いでいても、ご本人は井の頭の湧き水のように泰然自若として蕉風連句の神髓に触れんとされていたのであろうか。杉亭さん、戻り鯉のように戻ってきて、味よくやって欲しいと思う。

隆秀を悼む

中川 哲

何故先に逝ってしまったのだ。六十年も一緒に遊んだお前がいなくなったなんて、私には信じられない。信じたくない。深川高橋のお前さんの家の二階で、隣の講釈席永花亭の昼席の張扇と軍談を耳に聞き流しながら、手書きの「回覧同人誌」の編集をした日は、つい昨日のようだが、昭和十年の暑い夏だった。お前は相撲のことを書き、俺は「娘道成寺論」を書いたっけな。

それから戦争の時期をはさんで、共通の友達がどんどんいなくなった。奴らの鎮魂の意味もこめて、「雛の節句の翌る晩（三月四日）」「ご存じ泉鏡花「日本橋」から」に毎年飲み明かす習慣も十何年続いただろう。「これで出来なきや、世界は闇だね」と喜多村録郎の声色をお前さんも下手に真似してたっけ。

連句への興味は長年持ちながら、いい師匠を捜しあぐねていたのを、明雅先生に巡りあわせてくれたのもお前さんだった。因循姑息の俺だけだったら、いまだにうろろうしているだけだったろう。

本来の気の弱さと生真面目さを、偽悪的文章スタイルと江戸っ子の意地っぱりで貫いたお前さんに先にいなくなられて、俺は自分を写す鏡を失ってしまった。

凧に消えゆく声や夢のこと

峯田 政志

加齢現象だけは避けようがない。四十台には視力の衰えに愕然とした。五十台のこの頃は固有名詞の物忘れが甚だしく、ことに人名前を忘れてなかなか思い出せないケースが多い。六十台は何を失うのか心許ない。

付勝練習「衰虫」の巻の、

ちよいとそこまですててこの月

やあ、いよう、はてな名前が出てこない

の付合いが身にしてみる。これは素晴らしい巻だと思ひ、何度も読んでいるうち幾つか暗唱できるようになった。はて、こんな脳味噌にも多少の記憶容量が残っていたか、もしかして記憶力低下に抵抗できるかも、などと勘違いしたのが始まりだった。

気に入ったくだりや、好きな句を含む巻は連想の展開で割と楽に暗唱できた。しめたこれはいけるぞ・・・と確かに思ったようだった。

同じ詰め込むなら先ずは古典、しかも芭蕉さんなら損はあるまい、貧乏症の打算だろうか、「猿蓑」などを何度も読んだ。快適な語調が暗唱意欲を高めた。もしかしたら連句の作句スピードが上がるかも知れない。それに少々古い素材だが並べ方も頭に入るし等々、

効能を念頭に置きながら何巻か暗唱に励んだ。子規に言わせれば「涎をねぶる」こととなるが、自分の実力ではこれから始めるしかない、何せ大好きな巻なんだからなど自分に言い聞かせ暫く続けた。結果、「七部集」全巻機械的に唱えることは出来るようになったが、効果の程となると、人の名の度忘れ未だはげしく、連句の席での作句スピードに改善の兆しは見えない。

しかし一つだけ確かな効能がある。満員電車の中で人の頭ばかり見て半時も過ぎるとき、或いは読むものもなく待ち合わせの時間を持つて余した時など、ウォークマン代わりに快調な芭蕉連句を脳裏に流すことで暫くは楽しめることである。

実はもう一つ期待している方式がある。忘れたくない固有名詞を集め、独吟歌仙を作り暗唱することだ。試しに能楽の賦物に挑戦してみたが、独吟とは何と難しいことか。納得のゆく句でしかも快適な調べをもたないと暗唱する気になれないし、そんな独吟は至難の技と判った。結局これも未だに希望にとどまっている。この上は自然に任せ、正直に等身大に行くしかないな、などと自分に言い聞かせつつも、何か効率の良い方法はあるまいかと凡愚の妄執は消えない。誰か加齢現象でこぼれていった記憶を素早く釣り上げる方法知ってたら教えていただきたい。

\* 連句と酒 \*

「虚実皮膚」

中川 哲

味はひは虚実皮膚の新酒かな

(『猫養発句集』より)

近松門左衛門の作劇理念の言葉として有名だが、古今東西を問わず、人間の生み出すいとなみの総てに―演劇、絵画、スポーツ、宗教、科学から毎日の生活、人との付き合いにまで―通用する。

ことに美味しいお酒を口に含んで、連衆との座で恋の句を出そうと、廻らぬ頭で自分のこれまでに到達したことやら妄念やらを、走馬燈のように駆け廻らせていると、地獄極楽を往来している気分になる。虚実皮膚の醍醐味であるう。

俳諧の「軽み」の世界には到底行きつき難いにしても、美味しい酒がいくらかの手助けにはなりそうである。

福澤以登

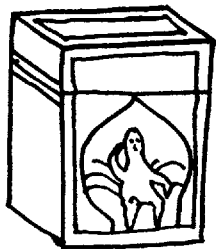
福澤 以登

杉内 徒司

- ・一月十八日 歌仙興行（深川芭蕉記念館）
- ・四月二五日 藤祭り正式俳諧（亀戸天神社）  
正式俳諧興行の後二十韻
- ・七月十九日 歌仙興行（深川芭蕉記念館）
- ・十月十八日 俳諧時雨忌（深川芭蕉記念館）  
正式俳諧興行の後二十韻

◎ 中島啓世 中川哲 内田麻子 中田あかり  
坂本孝子 副島久美子 市野沢弘子の方々  
の立机の式が五月十七、芭蕉記念館で執  
り行われます。お祝いですので、ふるっ  
てご参加ください。

○ 連句作品集「吉野Ⅱ」  
吉野の会の同人は現在八名。年四回程座を  
立て、作品はすべて明雅先生の御批評を仰ぎ  
ます。お蔭様で昨年は二冊目の作品集が生ま  
れました。残部あり。申込みは上月淳子まで。



都心連句会第二連句集「むれ鯨」の校正を  
している時、

送別の友は新酒を所望すと

三井武翁

女嫌いに男嫌いに

根津芦丈

恋の橋よそ目に見るも浮雲しや

福澤以登

（芦丈捌「あひるの餌鉢」昭和四一年三月）

の「浮雲しや」は何と読むのかしらと呟く

と、傍らの八十位の老女が、

「あぶなしやと読むんです」と言う、それが

以登さん。それで以登さんと親しくなった。

芦丈さんのお孫さんの美妙さんが家に泊ま

りに来てるから来なさいよ、などのお誘い

で随分福沢家を訪ねた。そんな折にはいつも

芦丈翁の話が出るので、芦丈逸話を沢山耳に

した。

「芋日記」には以登さんが伊那の芋庵を訪れ

芦丈と対吟した「春厨」（昭和四十年九月六

日満尾）、芦丈が福沢家に泊って巻いた対吟

「秋風」（四一年三月八日満尾）の他以登さ

んが参加した歌仙が数篇載っている。

「芋日記」にのせる歌仙を巻きたいからと誘

われて福沢家で対吟した「石榴」（四十四年

十一月八日）も載っている。これを首尾した

後、日を改めて二人で牛耳亭を訪れ、加筆を

願ったもの、何方所にも牛耳さんの朱筆が加

えられ、私にとっては記念すべき作品となっ

たものだ。

福沢家は、旧藩時代は尾張徳川家支藩の家

老筋の家柄。父君福沢重剛は明治八年頃は兵

庫県警察部長。西南の役では大阪鎮台の輸送

担当責任者を勤めたという。従って重剛晩年

の福沢邸は麴町、裏が東郷平八郎大佐の屋敷

だったという。

福沢家は男子を失ったので以登さんが家を

継ぎ、上野の音楽学校教員養成科を卒業して、

長く小学校の音楽の先生をされたという。

ある連句の折、以登さんが珍しく昔話をさ

れたことがある。

小学校に勤め始めた頃、九段の富士見小学

校で巡回指導にみえた滝廉太郎先生からピア

ノを習ったという。その朝松本から上京され

た東明雅、高橋玄一郎さん等居合わせた者は

ハツとして聞き耳を立てた。廉太郎が武島羽

衣作詞の「花」に作曲したのは明治三十三年

十一月であり、ピアノ及び作曲研究のためド

イツ留学へ出発したのは三十四年四月だから

以登さんは二十三歳頃の廉太郎に会っている

のか！ その時捌きの明雅さんが、それを花

の句にと望まれたので、左の一連が残った。

風車まはれば光るセルロイド 高橋玄一郎  
.....

羽衣歌子うたふナツメロ 鈴木 三余

廉太郎に習ひしピアノ「花」の曲 福澤以登

（昭和四九年三月二日首尾『浪漫』四九年八月号）

【Q】付け合いで、「花の句」「月の句」が型通りに出てしまい、もの足りない時がありますが、連句における「月」「花」はどんな意義があるのでしょうか。

【A】昔、和歌・俳諧の材料の中に、五箇の景物というものがあつた。花・時鳥・月・雪・紅葉をいうが、連歌師猪苗代兼載（一四五二—一五〇〇）の「連歌本式」には「雪・月・花・郭公・寝覚を景物といふ也」とある。この寝覚は恋で花（春）・時鳥（夏）・月（秋）・雪（冬）・寝覚（恋）として、特に重んぜられたものである。

その名残が現代の連句にも残り、中でも花と月とは、それぞれ定座を持っており、また恋も必ず一卷に一ヶ所は詠むべきものとされている。

花と月の句を重視するのは、このように和歌・俳諧・連歌の時代からの日本人の美意識の名残で、それを詠むことが名誉とされていたからこそ、一卷の中の数も詠む場所も決められたのであつたが、現代人、ことに若い人は、この伝統的な美意識に盲従しない人も多いので、このような質問が出るのは当然である。ことに、月は昔と言っても江戸時代までは、人々の生活と密接に結びついていたために、当時の人々は、我々の想像以上の親し

みを月に対して持っていたのである。

しかし、私は一卷三十六句の中、各折の折端の前にそれぞれ花の定座がおかれ、各面のほどよい所に、ナウを除いて三つの月が配置されているのは、春・花・陽に対して、秋・月・陰を置いて、一卷の情景・気分自ら一つの変化を与えているのは見事だと思う。もし、月三つ・花二つを一卷の中、どこにちらばらせてもよいというならば、悪くすれば一卷は混乱して收拾がつかなくなるのではあるまいか。あるいは月・花は詠まなくてもよいということになれば、禪をしめなくて相撲を取るように、連句はとらえどころがないものになってしまうのではなからうか。

いわば、月・花・恋は、現代連句を作る上に題材の要になるものである。

御承知の通り、「月は出るにまかせよ、花は咲くにまかせよ」と、昔から言われている。月の定座・花の定座、それぞれの面、あるいは折の中での引き上げやこぼし（これは月のみだが）はそれこそ自由であり、古人も決して咎めてはいない。むしろ定座の場合にだけ月・花を出すというのは、それこそマンネリズムになり、月も花もマンネリに陥る危険性がある。それを念頭に月三・花二をそれぞれ指定された面・折の最も適当な箇所に一箇所ずつ、どのような新しい月・花を出すかを心がけるべきであらう。

◇ 猫養発展基金ご協力有難うございます。

一口 橋野代々子 河野玄麿

二口 長崎和代

一万円 須田智恵 中島啓世

四万六千 風蘭社

五万 吉野の会

（敬称略）

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫養基金

— S — S —  
あとがき

○ 明けまして御目出度うございます。元日は、目覚ましより先に地震に起こされました。変化の年のまえぶれのように感じました。

○ 「読み易く」とのご要望で、紙面が変わりました。今回も色々な方々に、力のこもったご執筆いただきました。暮のお忙しい時期、有難うございました。

季刊「ねこみの通信」第十八号

発行者 猫養連句会

発行所 柏市つくしが丘二二二二二

東明雅方

印刷所 アトリエ・Neko